

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 3月31日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530831

研究課題名（和文） ライフコースアプローチに基づく若い教師の発達サポートシステム構築のための基礎研究

研究課題名（英文） A Research on Support System for Professional Development of Young School-Teachers based on the life-course Approach

研究代表者

山崎 準二（YAMAZAKI JUNJI）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：50144051

研究成果の概要（和文）：本研究は、ライフコースアプローチに基づき、若い教師の発達をサポートするシステムを明らかにすることを目的としている。研究方法は、質問紙調査（回答者数208名）とインタビュー調査（対象者2名）である。その結果から、とりわけ次のような点が重要であることが明らかとなった。第1は、教師教育者に関する考え方の転換である。すなわち、指導と被指導という垂直的な関係性に基づくフォーマルな教師教育者という考え方から、相互に支え促すという水平的な関係性に基づくインフォーマルな教師教育者という考え方への転換である。第2は、教師教育を担う組織に関する考え方の転換である。すなわち、教師の発達と力量形成を支え促すためのサポート機能が、形骸化してしまうような一元的制度化を図る考え方から、豊饒化していくような多元的ネットワーク化を図る考え方への転換である。

研究成果の概要（英文）：The present study aimed to reveal Support System for Professional Development of Young School-Teachers based on the life-course Approach. A questionnaire survey (208 respondents) and an interview survey (2 subjects) were conducted. The following results were obtain. The first is a conversion of the mode of thinking about teacher educators: it is to convert the mode of thinking from formal teacher educators based on the vertical relation between the instructing and instructed to informal teacher educators based on the horizontal relation of mutual support and encouragement. The second is a conversion of the mode of thinking related to the organizations undertaking teacher education: it is to convert the mode of thinking from trying to make one-dimensional institutionalization having the function of supporting and encouraging the development and competency formation of teachers to a mere shell to a mode of thinking designed to build multidimensional networks for which the function of support becomes fertile.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教師教育、ライフコース、発達、力量、サポート機能

1. 研究開始当初の背景

本研究は、申請者（山崎）がこれまでに取り組んできた「教師のライフコース研究」の手法（とくにインタビュー調査を中心とした教師個人々のライフコースの事例的質的分析）と成果を生かし、現在、離職者ないしは精神的なケアを必要とする者が増加しつつある若い教師（入職後およそ10年以内の教師）に焦点を当て、彼（女）らのライフコースを把握しつつ、直面している課題を明らかにすることによって、生涯にわたる教師としての発達と力量形成を遂げていくためのサポートシステム構築に向けた基礎的データの収集・蓄積・提供を目的とするものであった。

2. 研究の目的

本研究は、これまで申請者が実施してきた継続的な質問紙調査結果（第1回：1984年から第5回：2004年）及びインタビュー調査結果（第1回：1994年、第2回：2004年）を、それぞれの調査時点で20歳代であった教師たちのデータに焦点を当て、再分析することから始め、平行してこれまでの調査対象には入っていなかった多様な経歴を有する若い教師たちのライフコースをインタビュー調査し、そのデータを徹底して事例的質的に分析する作業を行うことであった。また、ライフコース研究をはじめとする質的調査研究の方法論を整理・検討することもあった。このことによって、近年盛んになってきているライフコース研究とそれに近接する質的研究における理論的実践的水準の向上を図ろうとするものであった。

3. 研究の方法

質問紙調査は、2008年3月～2010年3月に、静岡大学教育学部を卒業し、静岡県下の教育界（小・中学校）に入職していった初任期教師たちを対象にし、彼らの被教育体験期から入職後の新任期までのライフコースに関する問いを設定し、実施した調査（2010年8月実施）である。得られた回答者数は208名（男：69名、女：138名、性別不明：1名）であり、回収率は42.1%であった。

インタビュー調査は、上記質問紙調査対象者の中から男女各1名、計2名を抽出し、2010年8月と翌2011年8月の2度にわたって、大学までの被教育体験及び新任期の実践体験について集中的に聞き取りを実施した調査である。

入職までの期間については、回想法が主な手法となったが、入職後の新任期は、現在進行形で実践が展開しており、追跡法が手法となった。また、学級通信や研修の記録など文字化されたものも少なくなく、それらもできる限り収集し、インタビュー記録の整理や解釈に役立てていくことにした。

4. 研究成果

新世紀を迎えて以降、教師教育改革の動きが、激烈かつ現時点では混迷の様相を呈している。そして、その背景には、次のような3つの変動が徐々に大きくなるとなり、教師の発達と力量形成に影響を及ぼす要因となってきている。

その第1は、教師の人口動態（コーホートの入れ替え）に伴う教師文化・教職意識の変動が生まれ始めていることである。

1990年代後半から2000年代前半にかけて、学校現場から若い教師たちの姿が薄らいでいったことは、学校全体の活気を低下させていったことに加えて、30歳代教師層がいつまでも若手教師としての役割期待を背負い続けていくことになり、そのことが教師としての発達や力量形成にもすくなく影響を与えていった。

現在、2005年度あたりから、再び大きな変化が生まれ始めている。都市部を中心とした比較的人口の多い地域に限定的な変化であるという側面を持ちつつ、若い教師の採用増である。このことによって、学校現場では、コーホートの入れ替えが再び起こり始めているが、それはたんに平均年齢を押し下げるだけではなく、コーホートが固有に有する教師文化・教職意識の大きな入れ替えをも意味しているのである。

第2は、子どもとその保護者の生活実態・意識の変化と多様化の進行である。そして、それらの変化と多様化の直接的反映として学校や教師に様々な困難な課題がもたらされ、これまで培ってきた考え方や指導の仕方では即座に対応できない状況を生み出していることである。

学校や教師に対しては、期待の裏返しとしての厳しい批判も突きつけられることになり、その批判への対応として、学校教育改革も急ピッチで進められることになったが、新しい改革課題の遂行がさらにまた学校や教師を多忙化へと追い込んでいく結果ともなっている。

加えて、「学校教育＝サービス産業」論を唱えてきた学校や教師は、多様化した子ども・保護者・地域住民を、改革推進を共に担う協力・協働者から改革成果を享受しようとするだけの要求・消費者へと追いやってしまった。さらにその結果、学校と教師は、子ども・保護者・地域住民を、教師の発達と力量

形成を支え促す存在の一員として見なすこともできなくしてしまった。

第3は、以上のような事態の進行とともに、1980年代以降、生涯研修体系の一環として用意された研修プログラム・各種講座や研究指定校制度の下での学校共同研究活動など、教育行政によって公認化され制度化されたフォーマルな取り組みは花盛りとなる一方で、職場の多忙化、同僚性関係の希薄化、自主的研究諸活動の衰退化等によって、日常の教職生活の中において教師たちの発達と力量形成を支え促してきたインフォーマルな“発達サポート機能”の形骸化・瘦身化が進行してきてしまったことである。

上述のような現状認識を踏まえて、本研究の結論としては、以下の7点にわたって、「教師のライフコース研究」に基づき、上述のような状況をもたらしてきた根源的な考え方、私たちが無意識のうちに囚われてしまっている教師教育に関する考え方の問題点を指摘するとともに、その改革の方向性としてのオルタナティブな道を提起しておきたい。とりわけ若い教師に対する発達サポート構築としては第6，7点目の内容が重要である。

第1は、教師の発達に関する考え方の転換である。すなわち、単調に連続して積み上がっていくような考え方から、新しい状況に対応しながら非連続的に変容していくような考え方への転換である。

第2は、教師の力量に関する考え方の転換である。すなわち、あらゆる状況において適用可能な知識・技術の熟達というような考え方から、具体的な状況に即した最適な解釈・判断の創出というような考え方への転換である。

第3は、教師の専門性に関する考え方の転換である。すなわち、特定の領域における要因を分析し厳密な解を追究するというよう

な考え方から、様々な領域にわたる要因を総合し最適な解を追究するというような考え方への転換である。

第4は、教師教育に関する考え方の転換である。すなわち、教師を鍛える指導プログラムを強化する考え方から、教師が育つネットワークを整備する考え方への転換である。

第5は、教師の評価に関する考え方の転換である。すなわち、評価の結果とその客観的測定に価値をおくという考え方から、評価のプロセスとその透明性に価値をおくという考え方への転換である。

第6は、教師教育者に関する考え方の転換である。すなわち、指導と被指導という垂直的な関係性に基づくフォーマルな教師教育者という考え方から、相互に支え促すという水平的な関係性に基づくインフォーマルな教師教育者という考え方への転換である。

第7は、教師教育を担う組織に関する考え方の転換である。すなわち、教師の発達と力量形成を支え促すためのサポート機能が、形骸化してしまうような一元的制度化を図る考え方から、豊饒化していくような多元的ネットワーク化を図る考え方への転換である。

以上の7点は、今日の教師教育改革において、研究的及び実践的な課題である。この課題の遂行にあたっては、若い教師たちが自らの発達と力量を自己形成していく自立的な営みを築き上げていけるように援助していくことを取り組みの原則とする。そして、その取り組みを担う組織もまた、一定の地域ごとに自治的で協同的な組織として自らを再構成していくことを原則とする。そのことによって、日常生活の営みと人的ネットワークの中に存在していた、教師の発達と力量形成を支え促すためのサポート機能は回復するといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①山崎準二・望月耕太・菅野文彦「若い教師の力量形成に関する調査研究(1):2011 静岡調査における『教職の形成』に関する基礎分析報告」『静岡大学教育実践総合センター紀要』No. 19, 2011, pp209-222. 査読有

②山崎準二・望月耕太・菅野文彦「若い教師の力量形成に関する調査研究(2):2011 静岡調査における『教職生活の実態』に関する基礎分析報告」『東洋大学文学部紀要第64集、教育学編XX XVI』2011, pp. 79-93. 査読無

③望月耕太・山崎準二・菅野文彦「若い教師の力量形成に関する調査研究(3):2011 静岡調査における『教職観の形成と変容』に関する基礎分析報告」静岡大学大学教育センター編『静岡大学教育研究』第7号、2011, pp. 7-26. 査読無

④山崎準二「教師教育改革の現状と展望:『教師のライフコース研究』が提起する<7つの罪源>と<オルタナティブな道>」日本教育学会編『教育学研究』第79巻第2号、2012, pp. 40-51. 査読有

[図書] (計1件)

①山崎準二『教師の発達と力量形成:続・教師のライフコース研究』創風社、2012, 463p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 準二 (YAMAZAKI JUNJI)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号: 50144051

(2) 研究分担者 (0)

(3) 連携研究者 (0)